

プレス空知 2020年2月 深井尚子

先月は、ヴェルツブルクとのご縁のお話を書きました。今月はその続きをお話します。ライプニッツさんの交友関係は、幅広く、シーボルト博物館館長のクライン=ラングナーさんをご紹介いただき、私は今も、ヴェルツブルクでは、20年を超える演奏活動を続けています。そのような時、シーボルト博物館館長さんから、ヴェルツブルク音楽大学の学長、クラウゼン氏をご紹介いただきました。クラウゼンさんは、なんと、昔、函館に5年留学しており、日本の伝統音楽に造詣の深い方でした。尺八を習い、免許皆伝まで進まれている、日本人である私が西洋音楽を、ドイツ人のクラウゼンさんが日本の伝統音楽を専門にしていることは、なんだか、不思議な気がしました。クラウゼンさんは、大変日本語がお上手で、私と意気投合し、北海道教育大学とヴェルツブルク音楽大学の姉妹校締結をしようということになり、当時の本学の学長とお引き合わせすることになりました。そして、ものすごいスピード感を持って、その姉妹校締結に至りました。現在の本学学生が、本場のドイツで交換留学ができるようになり、学生の留学志向も高まっているのです。

このような交流から、ヴェルツブルク音楽大学の施設の見学をさせていただけるようになり、そのピアノレッスン室やピアノ練習室を見せてもらった時、先月お話しした、調律師、オルブリッヒさんの息子さんにお会いしました。お父さまは、現在、すでに高齢のため、調律師のお仕事をお辞めになっていて、後を継いだ息子さん、ブルクハルト・オルブリッヒさんが、ヴェルツブルク音楽大学のすべてのピアノの管理をしていました。息子さんは、お父さまが、「日本から来た SHOKO (私のことです (笑)) が、100年前の歴史的ピアノをととてもきれいな音で演奏した。」と言っていたそうで、私とは初対面でしたが、息子さんは、私を知っていました。これは、とてもうれしい驚きでした。ヴェルツブルクは、ドイツのバイエルン地方の中都市で、ドイツ語もどちらかというと南の方言が話されており、私のドイツ語もウィーンなまりがあるといわれますので、同じカテゴリのドイツ語ということもあり、現在も、私にとっての第3の故郷になっています。ご縁というものは、人と人のつながりで広がり、お互いが信頼に足ると認めることが大事ですね。20年に渡るおつきあいの結果、大学同士の提携や私の演奏会が脈々と続いていることを思うと国際交流に少しでも貢献できているかな？と感じています。しかし、ここ2年くらいの中に、クラウゼン氏は、学長を退任され、ライプニッツさんは、心臓発作でお亡くなりになり、クライン=ラングナーさんは、シーボルト博物館館長をお辞めになるなど、世代交代の時期に来ているようにも思います。本学の学生たちが、次の世代をになって行ってくれたらうれしいのですが。